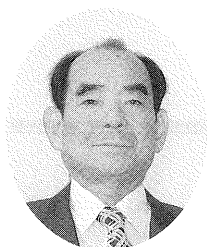


巻 頭 言



観察眼と洞察力を

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事
北 陸 支 部 長

今井良衛

昨今はあらゆる情報が、マスメディアを通じて過剰なほどに流れている。まさに、情報化時代である。農業に関しても、国内はもとより外国の状況をリアルタイムで知ることが出来る。それはそれとして良いことなのであるが、情報はあくまでも情報であって、技術ではない。

農業は地域の自然・環境に立脚した産業であるから、技術的に対応するには、地域の実態・現況を正確に把握することが基本となる。とくに、新しい技術（除草剤等新しい資材を含む）を導入する場合には、その技術の現場での実証が、より重要であることは言うまでもない。

ことに、現場における技術対応は、生産者の収入や地域の農業生産に直接影響する。畦道に立ち目の前の作物や雑草・病害虫の状態を、どう診断するか、そして、今後どういう管理・対策をとればよいのか、農家や地域の皆さんの期待に応えるのは容易ではない。安易な評論や結果論は禁物である。

ところで、彫刻家の佐藤忠良氏は樹木のスケッチをしている。木の姿は人の顔以上に、生きてきた履歴を素直に表現していると言う。枝を大きくはり、もっと伸びようとする壮木、曲がりくねった幹にこぶをつけた老木など、細かな観察をして鉛筆を走らせる。

そして、地面の下に根っこが存在をいつも強く意識し、何メートルも根をはり踏ん張って体を支えている様子を想像しているのだそうだ。

佐藤氏によれば、あらゆる生物は倒れまい、崩れまい、落ちまいと地軸と闘っている。その

姿を捉えないかぎりどんな絵も彫刻も絵空ごとでしかない。観察力や想像力を身につけることで、力強い彫刻を生むことができるのだと。

農業の現場においても的確な技術的判断は、鋭い観察眼と豊かな知識に基づく洞察力によって生まれる。そして、それは基本技術の体得と豊富な現場体験によって培われる。現地の実態を無視した平面的な知識だけでは、生きた技術になりえないのである。農業が経験の科学といわれる所以である。

農業をとりまく環境が厳しさを加えるなかで、行政組織や団体の改編が進行している。それに伴い、研究者や普及員・営農指導員などの現場関係者も減員傾向にある。農家戸数も減少し農業従事者の高齢化も進行している。

研究者や現場の技術指導者の世代交代も加速されており、現場で対象作物や雑草・病害虫などをじっくり観察したり、生産者と話し合う機会や時間が失われているのではないかと危惧している。

大区画水田の真ん中で、病害虫が発生して被害を受けていたり、干ばつで稲が倒伏したり、雑草害を受けていたりといった状況を、しばしば目の当たりにする。

地域の農業生産の安定向上と技術のレベルアップ、生産者の所得向上のためにも、圃場のなかに足を踏み入れ、じっくりと観察を繰り返すことと、過去の研究成果や実証の結果を確認して、観察眼と洞察力を高めることを切に望むものである。